

## はじめに

そろそろ教室実践レベルで子どもたちの幸せについて議論しませんか。

言うまでもなく、世の中は激変のときを迎えています。私たちの国はグローバル化の波に洗われながら、人口減少時代を歩んでいます。いままで当たり前前だったことは、どんどんそうではなくなっていくきます。しかし、その変化には普段は気づきません。見えないところでじわりじわりと確実に進行していきます。そして、あるとき一気に顕在化するのです。それはちやうど、お風呂にお湯を溜めていて、何かに気をとられていたらあふれていた、という状況に似ています。

子どもたちが将来なりたいと思った職業が機械にとつて代わられ、仕事に就きたくともそれなりの力がないと、アルバイト程度の仕事しかなく、グローバル化の流れのなかで、いままで日本人だけでした仕事と外国人と一緒にすることになるでしょう。それは、観光地で触れあう国際交流といったレベルではなく、利害関係のある高度で込み入った関係になります。また、「豊かな老後を」などというものは、定年の延長で古き良き時代の話になるでしょう。そして、同時にあちこちで、人口減少による地方都市の消滅が起こり、ふるさとがなくなってしまうかもしれません。これらは、すべて仮定の話ですが、「あり得ない話」でもありません。

学校や親、そして大人たちは、いま、本当に社会をつくる力をもった子どもたちを育てることが必要なときにきているのではないでしょうか。しかし、教育を顧みたときに、そうなっているかというのを首を傾げたくなる現状も多々見聞きします。

確かに近年の学力向上への取り組みによつて、子どもたちは勉強ができるようになったかもしれない。しかし、一方で、いじめ、不登校、そして機能不全に陥る学級、つまり、学級崩壊の問題など、学校教育における問題は依然として有効な解決策が見つかっていないのではないのでしょうか。

また、熱心に学力向上に取り組まれるのはけつこうなのですが、それが何のためなのか、また、これからのこの国が迎える課題の解決にどうつながっているのか、そして、さらにはそこで子どもたちが幸せな人生を描けるのが、ほとんど見えてこないのは私だけでしょいか。

子どもたちの貧困化が話題になっています。日々の生活で精一杯の家庭も少なくないはず。それでも学校は勉強するところだから、子どもたちの生活よりもまず学力という意見もわかります。しかしそれは、学力をつけることが子どもたちを貧困から救い出し、自己実現の方略となっていた時代の話です。

時代は変わりました。学力をつけるだけでは、子どもたちが自己実現をすることは難しい時代になったと言わざるを得ません。子どもたちが幸せになるためには、学力だけではきわめて不十分な時代なのです。

にもかかわらず、学力、学力と連呼し、そして、達成率のランキングを競争しているかのような現状は、沈みかけた船で宴会をしているようにさえ見えることがあります。

本書の読者のみなさんは、多くの方が教育関係者だと思いますが、みなさんは、何のために教育にかかわるようになられたのですか。何のために教師になられたのですか。何のために教育相談業務にかかわられているのでしょうか。

子どもたちに幸せになつてほしいからではありませんか。

民主主義の国だというのに、民主主義や民主的な手続き、いや、民主的にコミュニケーションをすることすら教えられていない子どもたちを見ます。民主社会を形成するのに、封建的に育てられている現状があります。社会人になるのに、社会人とは何かを教えられず、社会人になるための訓練を何もされていない子どもたちを見ます。もし家庭や学校でずっと守られてきて、いきなり社会の荒波に飲まれたら、社会的不適応になるのは無理もないことです。

いくら勉強ができて、試験で優秀な成績を取っても、社会にコミットできないままで、幸せになれるのでしょうか。この国は世界に誇る平和な国です。しかし、そこで、この国の未来をつくる子どもたちが幸せに生きているかどうかは疑問です。不幸だとは言っていないまでも、ただ、幸せに生きるための準備がなされていないと言っているのです。

クラス会議という実践は、子どもたちが人生を幸せに生きるための一つの提案です。本書が、学校教育の教室実践レベルで子どもたちが幸せに生きるために、いま、学校に、教師に、学校教育にかかわる者たちに、何ができるかを議論するきっかけになれば、これに勝る幸せはありません。